



官板

バタヒヤ新聞

文久二年正月刊

四

西垣文庫
文庫 10
7362
3



特 文庫10
7362
3

バタヒヤ新聞卷九 文千八百六十年十一月二十八日即ち

○英吉利

英國政府よて會議の後一人の執政王の名代と成りて諸人
よ諭せしとあり左の如し

予等女王の命を受け汝等よ諭す可きとあり總て外國との
交通を親睦友愛からんを欲す抑女王の趣意を歐羅巴諸國
を平安無事からしめよありと

以太利よて騷亂以後國人過半をヒクトルエマ子ウル王を
立て獨裁の政事を行しめんと欲す女王も常よ其人民等
よ幸福を得せしめんとを思ひ之を成就せんが爲よ大よ心

新開卷し 文久二年正月刊

西曆一千八百六十年十一月二十八日即ち

を用ひられとりと

一二月前より起り合衆國戦争を實し歎ずるも堪へとり
女王を此騒動を憂ふるが爲に歐羅巴諸國と同様合衆國
の南北两部共に加勢を爲さざらんを欲すと

女王を西治里の紛亂ある制度を改革し人民永く幸福を得
んを欲せり故に奧地利帝佛蘭西帝俄羅斯帝土耳其帝普魯
士王と一致し其國の諸民等をして早く安全ならしめんを
計るが爲に數箇月の間西治里に役人を遣はせり以後土帝の
有司及兵卒等と羽翼をふす可き歐羅巴洲の兵隊を置くを
止むべしと

女王を往日東印土領に變事ありし時速に汝等人民を救ひ
且金銀を融通せしむ最満足ありと

去年印土人の費用多きが爲に汝等惜まらずして上納金せし
を感ずるも餘りあり且政府の事ある時を思ひ諸民の爲に
運上を減ぜしむ亦満足ありと

女王を英國人民を深く愛するが爲に抱へ入れし多きの
兵士皆精力を盡せり故に一旦事あるに臨んで速に備へを
爲すも足れと

○佛蘭西

第八月一日佛の軍船土崙より出帆せり是を蘇士を越へて

交趾に在留せる佛國の兵隊に贈る品物を載せしる船にて
海軍附の醫師ジレール乗組とり此醫師日本より到り佛國役人
の助と日本役人の恵を以て江戸へ歐羅巴風の養生所を營
むことを望みしるが日本政府よても肝要の事ありとて之を
許せしるが只費用を惜み佛國入用よて營む可しと云へり

○以大利

那不勒を近來の報告よ云ふに國の民再興を計りて争闘今
よ已まず然れ共敵を諸方よ居留するが故よ時よ歩戦あり
て互よ勝敗あれども未だ存亡を決するよ至らず

○北亞墨利加

合衆國北方の軍隊を第七月二十一日マナスサスの近邊費
爾治尼亞の東北よて大ひよ敗北せり此時紐約の報告よを
委しき事を載せず只合衆國の難儀とのみ記せり

第七月二十二日紐約より其詳ある事情を得て日耳曼の
新聞紙中よ記す所左の如し

北方のゼ子ラールマクドナルの指麾せる軍隊去二十一日
の朝其兵を三隊よ分ち南方の軍隊を目掛けて左右より一
時よ早く押寄せしり爰よ南兵の備を山形よ陣を張り其角
尖ふる所をビュルルス村よ在りて其最後陣ある兩脚を
マナスサス迄曳けり且左右翼の陣を張りて是又ビュルルス

リムンよりマナスサスに達せり抑此陣列も甚便利なれど我
の利より彼に損あり如何とふれど何の備も敵に圍まる
るの患なく敵の向ふ所必ず我が正面に當れどあり既に合
戦始まりて北方の一軍前面に向ひ二三の軍を左右に向ひ
敵を一時に敗らんとして攻寄せたり南方のゼ子ラールベ
ヤウレガルドも北兵を十分に引寄んとて備を亂し退きか
がら其山形の陣を圓陣に備へされど北兵を得たりと思ひ
微塵もふれと攻立てより此時マクドゥルも十分の勝利を
得たりと思ひ既に華盛頓へ勝報を出さんとせり
時よ南兵も北兵のマナスサス迄十分に逐來るを待て俄に

踏止まり始めて戦を接せり凡そ合戦始まりてより十時許の
間かゝる敵を欺きて無益に力を費さしめ且南方を騎馬の
兵多けれど逸を以て勞を待ち其十分疲るるを見て一時に
攻撃しけれど北兵暫時も防ぎされ共如何す可き號令をも
聞入れずして遂に總敗軍とどありよける

此戦を論じて或る新聞紙に云ふ此時南方のゼ子ラールベ
ハンストンも戦方に関ふる時俄にウインセステルより押出
して横撃しされど北兵敗走せりと予思ふよ此援兵の起り
しそ不意に出るよ似されども是固より謀る所よてヨハン
ストンを早朝より斯く爲す可きの令を受けて待構へたる者

かり戦場の常ある事よて大将さる者固より明らる可きとかれど全く之が為敗れしと云ふを信し難し且南兵も北兵の挑むを受けあつら退きしを日暮を待て大ひに撃破らんとする為ありされど黄昏に至りて戦を始むるの意預知する足れり又其疲勞するを待ち且暗夜よ之を撃つ其混乱して相援ふ能をさる為あると云ふずして明らあり又北兵の敗れしを驚ひて騒擾せしより起ると雖も奇兵を戦場の常事よて固より多勢を用ゆるを得ず又時久しく戦ふを得ず然れ共奇兵よ逢ふに敗れしに至るの一端と云ふ可けれ共之が為總敗軍よ及べりと云ふを信し難し故よ

此奇兵よ逢ふを以て敗北の本と為す可うらず

此戦も未ど有らざる程の大戦よて北兵の死傷二千五百人より三千人よ及ぶと云ふ且盡く銃炮を奪われ又生捕らるる者十を以て數ふ可く并よ出奔せし者畏れて降参せし者亦少からず然れど今より後セントレヒルレ及マイルハキスコウルホセ共詳を再び南方の手よ入るふる可し

此時若べヤウレガルド更よ大勝を得て十分よ北兵を追撃しとらんよを實よ華盛頓府も甚危らる可し因て華盛頓よても早く其用意を為し速よ所々の城砦より兵卒及び銃炮を盡く婆多麥を経て費爾治尼亞よ贈りとり假令敵押寄る

も茲より一步も進むを得ざら—めんが爲ふり此兵彌アル
リンクトンの所々の堡砦を守らむ勝誇りとする敵兵よも敢
て一步を譲らざる可—又此敗軍よ由ても北方の騒動容易
ならず兎ても一晝夜よても鎮まる可らず

北方よて此敗軍を聞き人々驚くと甚—其様子言語よ盡—
難き程ふり是迄を勝利を得たりと云ふ風聞ありて雀躍せ
—所よ突然凶聞あり—故あり或も歎息—て飲泣する者あ
れ共誑誘する者多—偕此敗軍の罪を大將の其指麾を過ち
猥りよ猶豫—て進退其度を失ひ又事よ堪へざるよ在り此
大將未^レゼ子^レラールス^レモットの精密ある軍學よ達せざれども

り然れ共人民等却て大ひよ奮發—俄りよ此恥辱を雪ぐん
とを欲せり

合衆國の軍事よニストルカメロンをマン^レ方サよて味方の
敗北を聞や否士氣を勵まさんとして直^レ書^レを著^レして云ふ
世上の人口よ流布する敗北の説を謬り多—假令敗走—と
れむとして以後を能く戒めむ二十一日の敗走を却て後日勝
利を得るの基と成る可—

此敗北を誇るを大ひよ謬れり是却て北兵の益と成ると多
う可く之^レが爲よ人心を鼓舞—勇氣を激發—再度の戦よ
を必ず大ひよ發明する所ありて前日の恥辱を雪ぐよ足る

とあらん

倫敦の風説よも華盛頓政府よも歐羅巴洲へ替金を借得んと欲するが爲よ敗走の趣きを深く隠し傳信機の便も役人等立合て猥りよ通ずるを得ず

第七月二十三日の倫敦日記中よ紐育の形勢を記して云ふ華盛頓の報告も甚憐む可し實よ北方の兵隊も大よ困苦せりと云ふを疑ひ無し然れ共マクドナル及び士官の者後陣を以て殿戦して引取りしを分明かり此時北兵の死する者少からず然れ共前便よ聞く如きの多きよ至らず且北方馬不足よして加農砲を引く能わざれば盡く奪われとり并

よ輜重四十輛を失ひしも亦之が為かり其後よ及んで散亂せし兵卒追く歸り来りされど死にせる人數も委しく知るを得べし且此兵卒等の告る所よても格別の事よあらず只少許の加農并よ輜重を失ふのみよて討死も格別ならずと云へり

北方の人民南方を伐つの意益盛んよして市中よて偶語せるを聞くよ一人も和睦の説を唱ふ者なく皆再び戦ひ前度の恥辱を雪んを望めり因て怯懦ふる者も奮發興起して其隊伍よ加えらんと願ふ者前日より遙りよ多し

倫敦新聞中よ云ふ或る英人亞國よ行き其分裂する由を探

索一又二十一日の合戦の様子を傍看せり即云ふ北兵甚見
苦一き有様よてセントヒルレの方よ逃行一が實よ恥辱を
顯せり是畢竟根も無き驚きよ由かり若然らずを斯までの
敗軍よも至らざる可一且兵隊の混亂せ一を委一く見る能
もざり一がレジメント隊以上を慥よ敗走するを知れり
南方の大ひよ勝利を得一を分明かり然れ共北方を此恥辱
を雪んが爲よ二倍の力を振ひ後の戦も必ず見る可き者あ
らん思ふよ遂よ合衆國を恢復一と安全よ至ら一む可一
華盛頓よて諸州の名代會議一と運上目録を改革せんを
決定せり是金藏を富さんと欲一てかり爰よ於て輸入の運

上下等ある砂糖を一斤よ付二占士半上等ある砂糖を四占
士氷砂糖を六占士と定め又茶一斤よ付十五占士茄菲一斤
五占士カカラ一斤五占士下等あるシコレ一一斤二占士シ
コレ一末一斤四占士と定めたり

此定額を執政等既よ善一として大統領も許せ一かれを速よ
行ふ可一とかり

南方政府を十五兆元を借得んとて空く勤勞せり但當今五
十兆元も入用よて其後又五十兆元を必用とするかれを之
を工夫一して即國産の綿米菜テレピン油烟草麥粉を賣らず
して貸渡一百分よ五分の利息を永く取らんと定めたり

バタヒヤ新聞卷十 文千八元百六年辛酉八月二十日 日即ち

○バタヒヤ

ボイテンソルグのヂバルーサ部内チンヨソクと云ふ城下
よ住せるババセカ及びウータング兩人他所より行きーグ第
九月二十三日午後雷よ打殺されたり

第九月二十日午後レムバングのセダン部内パサングラ
ンの近邊よて出火あり其地の頭人の別宅ありアヌプ葺の
家并よ其他アヌプ葺よて竹造の家四十三軒焼失せり是も
全く懈怠せるより起れるあり其損失四百二十九才あり
バンユーマスのカリチーパタキツーハよ住せる瓜哇人サ

デワングサ其家族より別れ一時熱病に襲われ亂心して縊死せり

此人久しく病みおりりて死する二日前より烈しき熱病起りて斯くあり

○英吉利

下政府の説は是班^{イスペイン}才と馬羅可と爭論あるを云へり是を英國にも甚ど關係あり何とかれど是班牙の日巴拉夫^{キブラタル}は對せる所の馬羅可の地を掠めて地中海口に至るを英國にて好む所はあらざるを以てありロルドパルメルストンの説は英國政府の意を馬羅可より曾て是班牙と和睦を乞ひ

時約束せる償金を盡く拂をりめ且先は是班牙は質とせし馬羅可の岩かゝテネアンを以後返すべしとぞ

又下政府より評議の間はパルメルストンを以大利の當今の形勢は就て一説を述べり那不勒の人民もエマ子ウル王の支配下とかり并は王國以大利の一部とあるを嫌へるより若果して然るときも其人民も怪むべきとあり何とかれど何の國よりも羅馬政府を除くの外那不勒政府の尤惡政あるを皆人の知る所なり且又先の暴王と今の撒丁王と代るを欲せざるかれど世界中にて異なる人民と云ふべし然れ共斯の如くあるも實は止を得ざるのとあるべし

先よガリバルヂを七人の友人と共に火輪車に乗てり那不
勒よ行き其人民の爲よ虐政を除んとせし時皆大よ悦で篤
く之を招待せし人の知る所あり此時那不勒の兵士猶三
四千人もあるべきよ其通行を妨ぐる者あり况や之を捕つ
之を殺さんと欲するをや人々只手を懐よして傍看せり斯
く其人民の服せる故よ速よ謀を決し法令を改革せしを實
録中よも見つたり

當今以太利南部の形勢と人民を保し器什を護し種々惡事
を爲す者を防らんが爲よ兵士多く那不勒よ充滿せり因て
左の風説あり抑此輩の爲す所を尋常の盜の如く其身所用

の品を奪ふよあらずして國の疲弊とあるべき尤畏惡す
きてを行ひ全く政府よ對し讐を爲すなり其本人も羅馬の
臣人あり此人安泰よ世渡る程の身代かれど時々其黨數百
人許りを送り遣せるよ兵器財貨も不足なく然して其兵器
も那不勒の兵がエタを圍む頃羅馬政府よ貯へ置きしもの
かり又羅馬の都府よて神を無し天下の治平を害し且人を
殺すが爲よ兵器を送り遣せる輩あり曾てゼ子ラール
ジニの指揮せるエロン子隊を以て逐ひしとありしグパル
メルストンも兎角よ之を助けし様ふれど人皆之を憂へり
且英國政府よて此輩を刑せざらんを希ひ之が爲よ力を盡

せよよし是英國政府よて深く思案せざること見ゆ實よ
ルジニ及びピ子ルリの權勢を以て彼の惡徒を其地よて死
刑よ處し國家の安全を希うひ衆民をして不幸を免れしめ
んことを望む且那不勒地方よても人々皆此の如くあらんを
望むべし又那不勒人も辛き目よ逢へむ前の暴王と今の撒
丁王と代りしを其利害幾許ふるや是又明うよ知り得べし

○佛蘭西

巴勒の知らせし佛國政府の意も交趾の事よ就て専ら文武
を勵ますと云ふ又醫師一人を日本國よ送り遣し其長官と
評議し其地よ病院を建んとせり吾輩思ふよ交趾の季候

歐羅巴人の爲よも兎角よ害あるべし

紳士の組合より出せる巴勒新聞紙よポーヘンヒインの西
教を奉ずる土人等假令數多の組合よて禮拜堂を立んとす
れ共其所の長官必ず之を禁ずるを定法かれむ小兒等此教
を學ぶを得ずし已むを得ず洋教をのみ奉ぜり又ヒルレ
ラハルドよても凡六百人許の者西教を信ずるが爲よ相共
よ寄進して一禮拜堂を立とるよ千八百五十二年以來鎖し
て開くよふし是全く一部の國民之を譏りて佛の政體よ害
ありとすれどもかり但六百人中よて洋教を信ずる者ありし
が是又同トく惡みを受て推し除けられ遂よ西教を聞を得

ざるを憐むべきとからずや

○以大利

アプワセン部内のテルモにて撒丁の指揮官コロ子ルガラ
テリ觸れ書を出せり其文に云ふ人民を保定し諸物を守護
し且賊を驅る爲に此地に來れど善人は福を以て報ず可
けれ共惡徒の爲に毫も許容せざる可し又賊を隠す者あ
らば老少男女貴賤高下の差別なく炮火を以て立ちどころ
に之を打ち殺すべし且人を遣り之を探索すべし若し賊の
隠れ家並に其所業を知て之を役人より訴へざる者を其諸物
を没收し其家を焼拂ふべし

撒丁政府よても此の如き暴ふる觸書を出すを聞きガラテ
リの役を退け其俸禄をも減ぜん」と定めたり

或新聞紙に云ふ那不勒の近邊ふるソンマに於て六人の者
撒丁兵士の爲に殺されたり是を山賊等より兵糧を送りしれ
どかり撒丁政府より告る所も右の如し然るに又一説あり
此命を下せし士官を直にゼ子ラールに命を以て
捕へられ軍務宰相の方より送りたりと

以太利の平治を希ふ輩持しマシニの從者も近時佛國兵隊
の羅馬に永住するを不服と思ふ者より其證據を花押を取
るを務めたり

又マシニの出せも合同以太利といへる新聞紙に載することあり右證書の末よも必ずガリバルヂの姓名を記すと定めとり

右の證書の多靈のニストル役所の説と合することと其中一人のニストル其意よ違へる趣を衆人よ報ずる爲諸州の奉行よ國內事務宰相より密よ送れる書を以て知るべし即第六月二十八日多靈よ於て記す所下の如く以太利よ於て諸事取扱仲間と名付る組を近頃マシニの勧めよ因て國中何れの地よ於ても諸事を取行ひ又陰よ國人の心を勵まし其様子よ因て仲間よ引入るべき手立をふし其目論見を

成就せんと欲せりと是政府の爲よも却て害ある可し

以太利領を外國よ渡すと云ふ厭ふ可き風説あり巧よ之を廣むると雖も以太利人を必之を信す可らず故よ彼の取扱仲間より其從者どもよ命ト佛兵の羅馬よ居住するよ付て不服の心を起さしむべき術を設けとり且以太利王の政府よて法王領の安全を願へるを約せるよ一の浮説を廣むるを命トとり

以太利政府の政事を汝如何思へるや屢公會よ於て其可否を評議して行ひしこと汝之を知れり又如何やふ注意して處置す可きも汝之を知るふる可し

其政事を賤むと恰市人の徒^{イタリヤ}に争論する如し世間よても之を語る者多く人々思ひのまゝに説をかり心を傷まらむ者多し政府よても佛國政府の助けを以て之が辨解を務むと雖も容易よと止まざるべし

今行そんと欲する目當を人の説く所とも相違して却て其行ふ所もあり其主意を以太利政府の内外の難儀を引起さんが爲かり但以太利政府を言を以て人を惑わす者を預め制する力ある時を其策を行ふよ大に害ある可し予又左の趣を説く可し彼の取扱仲間を佛の兵の住居するを不服と思ふ其書付の倫敦より出さる者よも以太利の民

を以て花押を爲さしめんとす且有位無官の差別なく花押を爲さしむる可し又政府の官吏諸州に於て彼の組合を援くる爲に集會する者既よ死せる以太利の大政官此以前云ひ置きし即當今のミニストル役所の政事の根元なる旨を行ふよを羅馬に任居せる佛兵を妨げとふる可き證據を諸人に觸れ知らす可き術を用ひ可し

予此事を汝に説くも其國民よ之を知らしめ其身を保護する備へを爲すよ益あらしめんが爲かり然れ共恐くも其花押を命ぜし書状の格別よ嚴重ならず又怒る可き言もなきよ因て花押する共害なく且其身の備へを爲すよ益ある可

一と思ひ誑りれて花押する可し然れ共若花押せしめ
んが爲よ不法の事あらむ汝等其法を犯せし罪を相應よ罰
す可きを予も亦敢て疑むず

第八月二日多靈よりの報告よ云ふ諸製造掛りの宰相ペリ
シを以太利南部殊よ西治里よ於て諸道及び諸港の測量を
ふし且其修復をふす爲よ六週日此地よ居留す可し
多靈よ於て王國以太利の合同政事を盛んよせんを望めり
是其地方の肝要ふる交通を増盛んよせんが爲あり

○土耳其

孔子但丁の第七月二十七日の新聞よ云ふ第七月二十二日

コンスタンチン

よ當て新帝を例の如く自ら議事堂よ赴きて宰相の上位よ
坐し命を下して云ふ國內の政事及び勘定所の支配を先規
の如く行ふ可し又諸臣民の爲よ一改革を行ふ可し且洋教
の教頭一二人并よ猶太教頭一二人政堂よ加ふる古例も亦
再之を行ふ可し

